楽曲解説

［解説］堀内 修

10/16

10/20

10/16（日） 第886回オーチャード定期演奏会
10/20（木） 第887回サントリー定期シリーズ

マスカーニ（1863-1945）
歌劇『イリス（あやめ）』（演奏会形式・字幕付）

第1幕（約60分）
第2幕（約50分）
第3幕（約20分）

歌劇『イリス』の誕生

1890年5月17日の『カヴァレリア・ルスティカーナ』初演が、26歳のピエトロ・マスカーニ（1863-1954）を、一夜にして人気作曲家にしてしまった。マスカーニは『友人フリッツ』（1891）、『ランツァウ家の人々』（1892）、『シルヴァノ』（1895）、『ザネット』（1896）と、オペラをつぎつぎと世に送り出す。

どの作品も『カヴァレリア』を生むきっかけとなったオペラ・コンクールを主催した出版社ソンツォーニョが、上演と出版にかかわっていた。当時のイタリアでは出版社がオペラの制作に携わっていたのだ。だが最も有力な出版社で、ヴェルディとの協力関係で知られるリコルディ社が、人気作曲家マスカーニと新たな関係を結ぶ。新作はリコルディとの協力のもとに作られる。そして総帥ジューリオ・リコルディが選んだ台本作家が、ルイージ・イッリカ（1857-1919）だった。

『ラ・ボエーム』『トスカ』などのプッチーニ作品や、ジョルダーノ『アンドレア・シェニエ』、カタラーニ『ラ・ワリー』の作者として今日までその名を知られるイッリカは、日本を舞台とするオペラを提案した。マスカーニもこの提案を受け入れて、新作に取り組む。

ペーザロ音楽院の院長に就任していたマスカーニは、指揮者としての評価も高かった。音楽院の仕事をこなし、指揮活動も行ないながら、イッリカと協力して、新しいオペラの筆を進める。順調に進み、初演の場所も『カヴァレリア』や『友人フリッツ』と同じ、ローマに決まった。

1898年11月22日、ローマのコスタンツィ劇場で、マスカーニの新作オペラ『イリス』が初演された。ヒロイン、イリスを歌ったのは、2年後に同じ劇場で『トスカ』初演のトスカを歌うソプラノ、ヘリクレア・ダルクレで、大阪を歌ったのは、7年前に同じ劇場で『友人フリッツ』のフリッツを歌ったテノール、フェルナンド・デ・ルチアだった。いずれも当時のスター歌手だ。作曲者のマスカーニ自身が指揮している。

『イリス』初演では舞台だけでなく、客席も華やかで、客席には有名人が並んだ。音楽家ではプッチーニやボーイト、それにワーグナーの息子ジークフリート・ワーグナーもいた。詩人ガブリエレ・ダヌンツィオの姿もあった。

『イリス』は大成功を収める。翌1899年には、少し手直しされて（ミラノ版）スカラ座で上演された。そしてブエノスアイレス、バルセロナ、フランクフルトと、世界各地で上演が続いた。今日『イリス』はポピュラーなオペラではなくなっているが、20世紀に入る頃は人気オペラだったのだ。

ジャポニズムとギリシア神話

世紀末ヨーロッパの日本ブーム＝ジャポニズムは、美術だけでなく、オペラにも及んだ。

日本が初めて万国博覧会に参加したのは1867年のパリ万博で、江戸幕府と薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ出品している。その4年後に初演されたのが、サン＝サーンスの『黄色い王女』だった。

日本政府が本腰を入れて参加した1873年のウィーン万博で、日本への知識はかなり広まったのだが、それから7年もたって作られたサリバンの『ミカド』に描かれたのは奇妙奇天烈な「日本」で、日本政府が公演中止を申し入れている。さらにその8年後にはアンドレ・メサジェが、ピエール・ロティの原作をオペレッタにした『お菊さん』を発表している。『イリス』はその5年後で、イタリアのオペラとしては最初の、日本ものオペラということになる。

しかし、その後に登場するプッチーニの『蝶々夫人』と『イリス』には、「日本」に関して、実際の6年という間隔以上の差が見てとれる。

ヒロインが幻想の愛に殉じ、死によって決着をつけるというドラマの構造は同じで、2つのオペラを同じ台本作家が手がけているのは明らかだ。だがヒロインの造型が、『イリス』と『蝶々夫人』では大きく違う。イリスがまるで妖精のようなのに対し、蝶々さんは血と肉を備えた本物の女性になっているのだ。

2つのオペラのあいだに何があったのかは、はっきりしている。川上貞奴（かわかみさだやっこ）の出現だ。1900年パリの万博に登場した貞奴は、パリだけでなく、ヨーロッパ中にセンセーションを巻き起こす。キモノが流行し、女性の美が変わった。そして日本女性の明確で理想化されたイメージが生まれる。

貞奴以前であるイリスに、日本女性の血が通っているようには見えない。そして、マスカーニが日本について調べたと伝わっているものの、作品から、作者たちが日本に深入りしたとも見えない。確かに外見上はジャポニズムのオペラそのものなのだが、外見の奥には別の物語が透けて見える。

まず題名のイリスだ。あやめの花で、虹の女神の名でもある。だがイリスは、なぜか百合にも通じている。フランス王家の紋章「フルール・ド・リス」は、百合と思われているが実はあやめで、フィレンツェ市やメディチ家の紋章、それにファルネーゼ家の紋章も同じだ。そしてフランスの「リス」は、聖母あるいは純潔に通じている（ちなみに香水「イリス・ディ・フィレンツェ」は「百合の香り」）。

『イリス』の物語を一言でまとめれば、純潔な少女が性愛を拒み、太陽讃歌の中で花になる話だ。これはそのままギリシア神話の「ダフネ」の物語ではないだろうか。川の神の娘ダフネは、太陽神アポロンの求めを拒み、月桂樹に変えられる。

オルフェウスの神話と並んで、ダフネの物語はオペラの最も伝統的な題材だった。フィレンツェで作られた最初のオペラは『ダフネ』だと考えられているし、ドイツの最初のオペラはシュッツの『ダフネ』だった。『イリス』の40年後にはR・シュトラウスが『ダフネ』を作る。優れたオペラの台本作家イッリカはダフネの物語に日本の衣裳を着せたのだろう。

第1幕、イリスの家の庭には川が流れていて、娘と川のつながりを暗示するし、太陽神は登場しないが、幕開けの歌は太陽讃歌だ。イリスは、ダフネが太陽神を拒むのに対し、劇中劇で登場する架空の太陽神（イオールは「夜」に通じている）に恋する。何より終幕で、イリスの遺骸は太陽讃歌によって花に包まれる。そしてオペラは官能の愛を拒んだ少女の、月桂樹ならぬあやめへの変身でしめくくられる。

ジャポニズムの向こうにダフネの神話を見つけると、作者たちが力を入れた、聴きどころが明らかになってくる。

『イリス』の物語と音楽

第１幕　富士山の見える、イリスの家の庭　夜明けとともに**太陽の讃歌**が始まる。壮麗なこの合唱は、最後の場面でもう１度繰り返され、このオペラの音楽的な中心を成している。讃歌ではあるが、詞の内容が太陽神のモノローグであるのに注目すべきだろう。見えない太陽神が、オペラの重要な役割を担っている。

庭に出てきたイリスは**「淋しく、怖い夢」**とモノローグを歌う。自分の人形が病気になり、太陽の神に直してもらった夢だ。様子をうかがっていた好色な若者大阪と女衒の京都が、イリスに目をつける。

川で洗濯をする娘たちの歌に、花を愛でるイリスの歌が加わる。だが平和は続かない。やってきた旅の一座が人形芝居を始めるのだが、これは大阪と京都の、イリス誘拐の手段だった。劇中の娘ディーアは、父によって遊女として売られそうになって祈ると、太陽の子イオールによって救われ、死の世界へと導かれる。イリスはイオールに扮した大阪の、**「窓を開けなさい」**と歌うセレナーデにすっかり夢中になってしまう。

仮面をつけた芸者たちの踊りがくり広げられているあいだに、眠らされたイリスは京都の手に落ち、連れ去られてしまう。イリスの盲目の父チェーコは嘆き、連れて行かれた吉原に追っていこうと決意するのだった。

第２幕　吉原の遊郭　芸者のハミング（「あの娘見たさに」と記されている）が聞こえている。眠るイリスを見守る京都のところへ大阪がやってきて、二重唱が始まる。早くイリスをなんとかしようと興奮する大阪をなだめ、京都はまず贈り物やお世辞でイリスをその気にさせるよう勧める。

目を覚ましたイリスは、何が起こったのか思い出しながら**「ずっと夢を見ていた」**と、心細く不安な気持ちを歌う。

京都に連れられて大阪がイリスの前に姿を見せた。イリスはその声を聴いて、自分が心を奪われた太陽の子イオールのものだと気づく。繰り広げられる二重唱の中で、イリスは声の主の正体と、その欲望を知ることになる。大阪の快楽への誘いを聞いたイリスは**「まだ小さな子供だった頃」**と、寺で聞いた大きなタコに犯されて死ぬ娘の話を思い出す。なおも**「おまえの手を」**と口説いても、イリスが拒み続けるので、あきれた大阪は、娘を家に帰すよう言って去る。

しかし京都によって綺麗な着物を着せられたイリスは美しく、街ゆく人が賛美する。その中に、娘を探しに来たチェーコがいた。だが再会した娘を、父は汚れたと言って責める。絶望したイリスは窓から飛び降りる。

第３幕　谷間　月を愛でる歌を歌いながら、くず拾いが通りかかって、横たわるイリスを見つけた。てっきり死体だと思い込んで着物をはがそうとしたが、動くので驚き、逃げ出す。

死にゆくイリスに、大阪、京都、そしてチェーコの勝手な言葉が聞こえてくる。イリスは生まれ育った小さな家を思い出し、太陽の輝きを想って死んでゆく。太陽讃歌が高まり、あたりにあやめの花が咲いて、イリスの身体を包む。

- 『イリス』の中心を成すのは、オペラの最初と最後を彩る、大規模な太陽讃歌だ。
- イリスは登場のモノローグから生きる不安を抱え、夢に意味を見出そうとしていて、それが第２幕で具体的な怖れになってゆく。
- 人形劇の中でイオールとしての大阪が歌うセレナードは、イリスの心を捕える歌として重要で、単独でも歌われる。第２幕でイリスにせまる歌にも、誘惑者大阪の魅力が聴きとれる。

［楽器編成］ フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チンバッソ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、グロッケン、タンブリン、大太鼓、タムタム（大・小）、等）、ハープ2、弦楽5部
バンダ：トランペット4、トロンボーン4
※上記は今回の演奏上の編成

ほりうち・おさむ（音楽評論家）／東京生まれ。1970年代からオペラとクラシック音楽に関する執筆活動を行い、雑誌や新聞に寄稿するほか、テレビやFM放送にも出演してきた。近著には「オペラ入門」（講談社）、「モーツァルト・オペラのすべて」「ワーグナーのすべて」（平凡社）がある。